



冷文集
前編
三

利
924
三





淡々文集卷之三

十六

八月録

七

佃九郎玄満子婿の酒徒評

二

守氏玄孝の奥書

三

長栄窓の銘

四

雑話十二章

五

病中倦夜

六

挽詞并秋、をす

七

青錦堂の紀并道行

八

幸化小を、たる文

文集三目之

- 九 流斜之人、く子紙
- 十 其舟より其素を掲げしり
- 十一 其泉の神より先考体計
- 十二 白拍子能信備
- 十三 大圭碑文の文
- 十四 間脈乃くくふ
- 十五 頼光綱子令れを返す画の價
- 十六 松八のきし修りみ
- 十七 松雪くくふ

- 十八 武陽渭少くをス
- 十九 阿保院の画の價
- 二十 七世孫手録の修文
- 廿一 報信四章并、吾答
- 廿二 十七回小編くくふ句
- 廿三 勸學子歌
- 廿四 嗅洞亭小抄くくふ辞
- 廿五 戸田氏三回忌集之序
- 廿六 妻小おらねる人の許へ了きり
- 廿七 林外老人へ贈る年加文

廿八

後東亭

廿九

野人へはらう

三十

小掣天神を納の政

五三
五二
五一
五十
四十九
四十八

第一 佃村九郎云清小僧

酒徳辞

老人あり雲衣幕トバリふし雨月をを結し堤
 をたし席しそん花多残おし。心の如く小朝夕をも
 結し治世の中乃治を品そのなり。武功の余光を頂
 き子孫の口をさかすははたはううた。ましくけはて
 ちり乃ハはらう田乃里の暮秋をメて志如也屋煙。
 起ると看と。夕夜そえてち又看む。解時ハ川風平吹
 是さむまは新よ画我鳴ふ。さの法きめくうさ家
 獨乃夕アハき如を脱キ是をそよして石船く空

古記云
 けさたぐ
 稻のりく
 五郎書ニ
 佃ウラタ

窮りよは深く。心知れ人抄あへて茶碗を出す。
此のしをたをとうとよまこひ散るかしらに教き。三
盃と又六盃をみ流る強ひるけうき。参りて。神
風乃いさらよ。曲しぬんう。君子供道も佛の友
も。心裏おの流るう。佛のやむ。誠平阿りこき老
乃強ひ

おとこ
ほのこ
んとや
ふ

心をやるといふ志のやと

雪雲うくぬ人のこの象実老人のうへへ。劉
伯倫^{カササ}掛を左右の味方とけりて程確を又看む。
一人は明白なるま束とのふ志く抱をなた

才二 守武志守之奥書

六波羅密寺のむらうよとけき束といふ津岸あり。常に古
人乃事れ癖をそえへ世に埋るる古人の巻をあ
りた事。間平段と入る。人の老弱弱也。ち本の小
武紙より事あへるをそへて宝とてとてある
予是後居るめえ事一方一割ととて第一時と
今角倉乃文庫ふとくゆり。西本のうらう徳信のそり
ちりそりけい。武士乃心もわくく。屋き一物とて
中時庵徳之

才三 春崇へ遣す窓の銘

高野
剛明語之

高野北窓下。自謂羲皇上人と。清風の来きるや

嘯きくそひく落葉拂きくそ折む。後人陶窓

と仰てうやみうやむ。羨まざるものたり至る。

飛簾孔
窓ノ名ナリ

屋上子飛簾孔を云む別名也。天地怒る時吹

怒於土囊之
口風賦

草能葉のゆくか。地固石さく如くこけ夏の死を

名れぬ。た日も吹。流石にぬるる文音は吹く。川を

して日言さ夏乃氣をささんと好む。そを

とさんと氣ふとの氣おとん涼しかり。忽ち葉の

日乃氣をさし是或又して夏日子遊ふを葉棠之屋

屋卯窓ハ
屋根ヲ切キ

卯窓と名付るそのを仰り日く故人を能く保く

窓ヲ明スルヲ
新ニ号ク

そのを

涼しさの富貴を来さう松乃存

昔了ゆり志我幸なり

才四雜話

一蒼顔子文字を教へる。語今能来くと一字もよ

じ事改ると別名の邪字をして飛言へ。手録も

先祖を悪るやその進くも殊れ文字細工を移りて。此

日予中守とて和漢おとる子の自中を感し。墨之成録

てそ道子日我空しく。昔者ハ眉を擧めて能きと存之。然

とも風雅のれをい深う。如人の手記を額すも。何れ

ふもつたなきよの也。自慢をいひぬりて守るべくは
も。同以謝聲劇画をすへしなまへは清輔もその藝業
好もよあし拙なりと云はし。其事とて事非くうといふ。
傍人のよま時危字を字同おの事あり。其道也。其用の
事と笑ふ事云非也。雪溪先生と能書の名有る人
なりしりすの事あり。そのをいひて今て下れ名も其
也。又ま一紙の借紙を有ん。そのうへ一字とてを説く。いんまを
も又まの道理をいひて。その事あり。そのりのかくも有る。
強聲劇画をいひて甚悦ふへしや。大笑あり。長夜
腹淋しく厨飯ありや。ア。僕云有り。何れ菜有んかと

ア。有と云何々と云ふ九年母之つありと云。此名鶴
りともおとけりと又大笑

一東坡の信の工事も字達の画一も嗜みありと云

一光悦生涯の心言記を甲斐國山延山長廊下れ朝口の
額すておとけいふと云。通長ノ二字あり

一又ふ所の事をいひて。其事大徳ありており。其を
九年面壁して。其名僧和漢おとも習ふ。其像也
念し。其愚索大徳の社九年の月。其事ありて。其を腐
ら。悟りて。其事不無用なり。其事あり。其念面壁也
其念一念。其事あり。其事一二三と念して。二念あり。其

と榮華此情なり教乃要主也一棧九念して向ふ
 壁ふても窓ふても岩ふても栢樹ふても海も山も
 其時の心の的をなせんと二種の的を捨て教年
 時を築を放されう又昔の象として其意の
 深もよき事なり
 戸月痛きお柳も昔思ふ孤舟の一名也川上の
 観念
 深も見性成仁天國の虚名なりん澤庵も昔思ふ
 濱下。至處難信とはる者此心書をよく織り
 らん古賢禪師海下光りも達人を責るうあり
 こと事なり
 一昔義士有り其妻の持る扇として骨を
 たり掛おめて
 秘花きしをえ侍るおつとの手紙よく
 用ひぬる絶死

古賢南紀
 人の海印光
 ヲ作

おとひよありまうりこととてこれ世ま何
 き哉その比乃
 日くやもかへた事之切方の心を感し侍り
 たり
 一英一棟のまうり陰水の流るるとりよ
 大空をを思ふ坊
 と此跡^{ウツキ}取るおの陰下禪ををて云人あり
 事云きハめて柳
 一本寺深んといへん陰ふをすつう
 たり見まを道のへふ
 清水流るの西の陰なり時ふ
 事あり下御坐
 神と云ふなり今も柳あり古
 流と云。新柳の時見侍りたり
 陰ふせん年終る年の心ハ
 いう事ありや東北利よる土
 佐家
 へ侍をハされり是も昔杉戸の
 陰なり捨庵をかきしる官
 女をす事ありや答ありたり
 と思て此事なりとて

折竹ふるふ土依家の苦へもたけはさるるり仍て賢の
 事以てしるる 道の人子清水流るる柳陰志るる
 こと立と身りつる 獨行潭底影。數息樹邊身
 賈嶋々自愧の句ふけへと道の人り新と新た今り
 あり

一つの法ん声時辰へあるるる女の文仕お後りして
 こと坊中勤て故へ功の時御録ともいと奥あまてを
 の方名をりふるるづる。をきるるを何ありるるれと女と
 何んを志るるるとしてをなぬ。お御めらみおひくきて二年
 とを立とまらつるるとしてをなぬ。心をなぬとちの女なりり

一茶を指とるる人云茶ハ二つ並カせておみとるるやうに
 御をとおしては三百番の外なり二つ並ては六千まぬ
 了先互先を扱つりりり一方量なり思りりり不倫中
 とそかくと一人あり又茶をなぬと論あり中世下の事
 一振物おまらしてお度と論道と称するのともをふして
 る人あり當時茶をなぬてハ仙ト也是は對するとの
 宗匠の御傳言名を是は言りてをさねるる仙トお
 後を言ても不悦又ねるるても後もとて其其境の遠
 ひるるるへりのなり風雅の上を黑白とちまらふなる
 ことのりあり茶を一人の上をを指てん其極也

日更時より午とわつてて下す三三とわつる如し
風雅の務者まうちたよるるおあつる一一人を
歴千人を感きしりてもわつ神さし下すも一一人者
流をささ上よや遠はまやわたりひくして月雪花杜宇
をさすしみつるる分ををささるるものなり上よ心衆
口金をささしけりす近しそ通ぬ然してはは
時ら牧業の書したるさく回ふ發や容を白をさ
思をささるる早し一人をささるるさく發して風雅
の本さふあつる神意す叶ひ鬼神を感きしと病
魔を退き雨を祈る名を以て通し悪夢を払

ふ是等神意す叶ふ如く一一人をささるる有る心配
家子配すふ配まへん静之甚態のつらまふあり風雅
ハ家と氣の如くお空心有意をむすひつる氣と心は
たささひよく務時を佳句とかり心と氣相和の時地
乃句と如りの也心ふと氣の中けりる時をあらた句と如
也此のすそふあつる相をささるるさへ一一人をささるる
をささるる一一人をささるる上よ下よあり
一昔はまの太ち上流の時ささるるの身
いつし一一人をささるるのまら一一人を
ばんびりいり桶とぢの巻

此一丁一真を古さるるあり歎く

一屋敷小引日 桐花あやめ 七夕 菊子

四季の是つてみと云 侍りと云 花さぬと云 並
敷を月見小庭の御城之御能を物々骨の受小
歳時并て正く委枕上り立をみひ並つてみ能
一過り亭の裡におひまるとして 表ハ明りたり 感
くして一子も忘るる 翌日甚並敷を打たれた甚御
接姫すれぬい何と云 並敷を君はゆりねと御上意
ふてありし時 此表亭の中お能てよるおひとは了上
くく花さるとも 一や樂屋への上彼お能てなるとも

と物此を並つて子のぬえおハハハとこつさるるも
花さぬを當てお上侍るより一先お上りて幸
く家小歳時并て正く委枕上り立をみひ並つてみ能
らんと云 一名お能て重ゆると云より一月えと哥
ふ心をもちしもの之礼を必風雅お心なくして
叶ふ事也 隆の文版のりすしてを舞
もくもおもくもやと形心つらむわんれ
は道知くさる事 亦さるも昔一老人の夜話有
一宰予晝寝子曰朽木不可雕也 下畧より ちる夜
さられんとしてさるる可なり 呵了おんくもふらいつい

ワカ
源氏物語の良きありて。序に吾舎せまうく日本の
道理を通じり家々の事よりくまなひとまへ
信ふ源氏のでふをなを能く吾返りへも皆のうら
ぬへ一筆予畫いぬらうらうらとりの事よふや
うけとま子の不構始るけりまてあさう色未揃
花の夏駕す久うかの事をまかりてねりへとも
程あつたまうととさうくありさうしりくや何道
もらうとてよむ心也程の字心をとむへ一筆ありま
の事を始りて遠き圃斗をみ教るもいこの
事なるは是又ひとの心を人く能くうらうら

源氏を金瓶梅のこゝとハ一筆予源氏の道理分
明ありさうと「やとあ神も衣とさうんありさう
つこのそれとなりれを次は源氏とて奇之
能く奇ふて能く相借の大切なる事ハ明かく押して其
日本此事を中しく誦するもあへ又韓退之云宰
予畫^{ニカケリヒロニ}六段奢侈を憎むの語なりん畫少畫也混
雜^{ニカケリヒロニ}之事ん

第五 病中倦夜

わしは切ふ老婦時夜と云病有り打ゆきさるけふ
し。家うちもやと倒きて今ある事乃やうらうら

論語
幸解

文庫三

〇十一

世の中をうろくみ侍りき。志六阿まを、夏裡可
一書を始り

後乃世をかきけりとも一くそ

あゝ如旅ふし小曲の中一山

漏る沈黙滴。障衣子絶又聽。東窓未生白。枕上
一灯青。右雲溪先生病中侍疾之吟。時今思

出ぬ 良薬甲、病魔を遁れし時

うー生く何をまき風上世々存

障絶窓志らく灯空一

才六挽詞羊秋へを又

父存在乃時ハ立子あみねるふ必ハ徳をつく
とをあせらん我孝とをあり。考子法かふ法はる年ハ
泣きを地よけしぬき天をあふく。皆是孝子事ツコウふれ一
也。なとしてこのつみ信有ハ常にして。若と相引くた
ハ信の端。そ始端のは一あさあり。熱る平位キを常
るを信みして。其信信ふり。されハ又其甚端ぢん
や。そま誠したあゆするをのへ面オモ友おともは。そ誠マコトり
信を解るるまらに似たり。只ん乃乃ふ所誠常也。そ深
くそれ人をあつ。深くは家を識るて。其必信ありと
謂ん

欽哉叔子ハツヒ世に人と家

ナセ 曾 孫 堂

高榭曾孫堂者静山別業也七年春從按江右

批唐塔置後苑

堂上之名家詩大家及大禪師律師各文章蘇荷

著術内此冬需下窓して一文をまよきス

道如塔屋屋在右と云る高榭曾孫堂

と云る之を塔道新

公立平山堂。第一平山堂名く公立能悟乃。藤平垣之れ
如玉柏。茂まる庭の昔衣履も雪如も志く重ぬ。

歌吹海 陸務親 清くハ操をわくまき。浪りかたきき。琴をばありん

遠橋照滴

加琴統

憶在錦城

歌吹海

柘舟 詩

汎彼柘舟

檉葉 詩

見説 秘意抄

徳川ののり

つらみみそめ

をふりけり

石凝姥 日本記

石凝姥 治工

探天香山土金作日菓

和何りまき

奉白集

念山の記出たり

土精為石

氣核

物理論

記

おあまさつ一丈余。まは地を定法。身有かくてよ
アハア 土精邊ア凝るあり。四時おの法り。標ア

木葉

〇三三

薜荔以下
まろ常子おまろとの香州ハ別。薜荔薇薜薜花

客醉賭
榛栗一アあひひ榛栗柿桐梓漆乃滴を載ふ。そやれ若

江ノ賄
こたの谷 悪しきねまひひくた。若う代乃常盤能付乙女の神を

いかにてね いかたつしむとこねのち七年又帰る。若のこ雨

こやの谷川ナリ水はそとてまやち山の産る家

若う代の ふうかきく若う、まあうき剛めが碎石徳福が破石小

常盤 若う代の 母、まゝし。若撫を拂つまを洒ハおの流りし松風を

とここの石ハ云々う乙女の神もいふ、かろん匡房

松風を解 解。そ風言々清角徹を奏した。んごる小龍を亡し録

大食国貢松凡名、 角清徹獲は口録 孤向を破る

茶飲出 其鏡を挫き 其鏡を挫き 其鏡を挫き

老子出 小且哲石の破ハ碑玩て敷くゆりく母。塔文字なりれ

石の鼓ハ 且哲詩 ハ磨滅の口はくひあ。そ人子代までそ料由さうく

石鼓殿 四あま心宿をあらん。若れ先山吹乃うく石はくくせん

そ料由さうく 云々) 時無 ちまきぬ流る清あふ杜宇の歌をまか。ハの確子老

高僧 乃鼓のますねおろ乃言きふ入る月也。山くを流る

る茶本れおろその雪の如茶。若乃志く衣。時雨の雨乃

衣樹ふりけ形へて得させんを。碎存子ある。拱き

第ておとへうたか。若若に苗ふまうく花の衝柳陌

の咲青く樹のまうく日乃本れ之味線切。翠今。

若なく表あはけ守あきさるふ小後圃まむつく明若

んく一あらん。客口我傳へて書となすこれあらんや

屈

芳草陽子橋山と云妓あり。百人肝を縮め朱
 唇を窺ふ。とや有り。其金用盡せとも心残カシツ攪
 める酒家の一ま子生涯のつれなきかひ傳く。
 或時夫れ花見佛の法して巫電志多。此の發も神も甚
 子嘆遠く別れみちのくは方あんと顔子身をさう結く街
 秋風もたや吹きさうくを乃其の

言 哀れをさうき志く川の岸

とよみてとやう切拂ひ山林ぬかく入るよ
 恩乃里人有かくたさひとらておるふ振
 くれハ

思ハ下

其を踏るさう一ありれハ山里子
 其みそ衣幾件ゆれも

又

糸のけのむり一裁今よりうら
 鬼乃と字く海山をこの里

鬼乃と字の海奇ハ縁ハ一塔の独寂き草叶
 へ。奇の風情ハとふもかくおも真乃ん草葉
 ねとさうさくうへあうんと感さう。好く
 糸竹の昔とつふを。此乃書となさんとつ
 あり。怪くや一みんをハ糸の底さう山輝

きんりう
 形述ナリ
 景述ナリ
 けいけい
 まんりう
 蜂媒 劉後特
 蜜口傳 糸好信通
 為花評品 城東凡
 香影 粘行花英去
 疑是 纏頭利市紅

樹中の一僧

西林寺惠持禪師
木室三百歳

庐山志元

將相に至りて
仕官而將相而
歸故郷 石起語
喜でこれをとス
喜為天下道也
放定年言ス
永叔孟錦堂記

幸化平也ス

出づ。其是也のよ子評品しと東風子嬉々
せり。ここの。さきとる不劉後持の輝輝の言
成下しとこれ。陳留縣の樹中の一僧。三百歳後
磬を叩いて生滅を證す又去。一語不言笑ハ
ふハ年光乃移くさる相見。骨節滯堂苑乃遷
物將相に至りて富貴ふしと後歌子祝。永
叔の年光動う世辭をかくとも。パウく今此
静山老人の寢とあり。四面風色及ちり
くくわ

幸化平也ス

坊とあるなり。其坊とあり哉用事とこのおと
あして。京平ハあり。ゆゑの智平たり。く
み他。ゆれけのよくとなく日教をいせれ。此語之
味中。窓乃雨は千里の旅をん子。梅樹輝
よ。其よとありあり。割古キ名をく。八橋名
朽く。ち長家梳を。名香。か。か。く。ふ。ひ。あ。ま。れ。を。
ふ。を。道。乃。泣。を。い。て。得。信。る。あ。ん。と。風。雅。の。神。の
初。ち。人。一。別。文。其。ま。よ。ま。と。ま。か。く。て。も。ま。ま。乃
此。あ。れ。と。一。橋。乃。流。風。を。得。り。時。これ。復

道の江
机心ぬま
為家道位
其事ヲ

本詩

本集

二五

句中留あり

轍士ハ昔々
 泥足同シ
 和章騎馬
 似家ハ私
 飲中八仙歌
 三瓦兩舎
 妓ノ集ル施
 舎ノ水滸傳
 識

轍士鉄のこくと歌む。泥足りぢふふ葉ハ船子葉り也。
 沈酔の一書くと独歩ふ。昔今三瓦兩舎のな種
 来つ椀のちいらハ朽くて。又あつとすまて毎年回
 一うじ。口十子ふとし。ちりまれらんふねとひ出
 り家ちまを夜うりとずしらまを我。彼柳をう
 そむり家おの整りもやうし。体斗もまはりいさ
 けりし。この。跡う垣根もととまふりうと。卯の足
 のちるれ古る子。ほくき彼の一句子ハ真ありりり。
 涙と碎てちむをを抱き。甲府無下ならぬ此階の

跡う垣根
 後、頼朝懐紙
 子まを和正
 名う漢文
 〇七

達人。今雅をいらく厚んや。時已ふまを泉流きん
 又孝の道を畫して又。新ふ先人好る子志さうふ
 一節。月日の昔をうよよとて。あまを吞。舌を放
 て。さちめあるさうひとを字ゆ。はま表又のちりまま
 泉

昔流らん画も同一むめのちり
 漱ふれ月めきこる。一句のハ種ふ品らう。如下婦。子
 も白ひて子経。美花をかしちりり。いあへ今
 おううも子。ちりらせてハ世の上。人の真体もこの
 れなう。志くね。子の儂。ちふ足。知り如。如こ控

馬のぬねて
 〇七
 京祇自畫讀
 〇七

心裡吹毛
禪語之

との^悔ある心むけしを。至って孝有んとの紫草も
 耳たやその凝^こるるを。中しく動^うる家朝夕の心
 裏吹毛。常々^と磨^らすの一棧^{せき}高く清く。徒^た小^こ選^{せん}一^いあぢか
 ちよ柔^なま折^りひて甚日^{しつ}そ末^まのねろそ^ろな^なくぬき
 泉の風流。重^{かさ}ハ環^わよ白花^{はくわ}れ光^ありを浮^うへて。孤^こ同^{どう}我^が
 破^や了^り。皇^{こう}都^とを在^あり^まし^し思^{おも}やな^なく^く妻^{つま}杖^{づえ}を厚^あの
 孝^{こう}く^くよもあ^あひ^ひ家^けの^の日^ひを^を筭^{そろ}へ。泉^{いづみ}源^{げん}を置^おて^てと
 實^{じつ}客^{かく}ふ^ふ余^あれ。吾^わふ家^け。霜^{しも}茂^さけ^けを^を折^りて。樹^{じゆ}ふ^ぶの^の葉^はふ
 輝^き光^{くわう}一^{いつ}
 立^た極^{ごく}と云^いふ
 終^はり^し也^{なり}
 耀^{えう}厥^{くわく}福^{ふく}を^をく^くす^す。あ^あく^く深^{ふか}く^く長^{なが}く^く極^{ごく}う^うた^たい。

いづみと云
くうと云
泉ニテハ又格ナラン

才三白拍子之画讚

源のさねらけくへけあそんそはうりる時り山
 崎^さを^を命^{めい}と^とた^たふ^ふけ^けふ^ふと^とあ^あは^はと^とよ^よみ^み侍^して^てさ
 一^いの^のぬ^ぬて^てあ^ある^るハ^ハ母^{はは}を^をあ^あへ^へ一^い
 形^{かたち}く^く多^た法^{ほふ}一^い報^{ほう}ま^まか^から^ら始^{はじめ}言^{こと}乃^のむ

下ノ白ハ

なるあうれのうかーうらん 志^しろ^ろあ^あき
 才^{さい}三^{さん}大^{だい}圭^{けい}碑^ひ前^{まへ}之^の文^{ぶん}
 石^{いし}を^を切^き石^{いし}我^が運^{うん}ひ。始^{はじめ}朝^{あさ}圭^{けい}子^こう^う志^し家^け一^いと^と彩^{さい}子^こ

筑ふさきそく。他善乃いとなまとも。穢平羞鏡ぬ
そくひてつた乃志ふく。いふくかたた交里をまて
ぬ作くたりや。さうとまふりて老安や。さくと墳あふ
む久の風行おとらう。建ぬる。何となく神ぬ。徒
重し

おまひひりけあま名そまの玉かハ

右葉月三日妙導招提よ入く速く

才西 間脉くまと葉 宿藏主

誰習崔よ角あし角あしは牡丹花老人必塗ら
ん。胤小牙あし一牙あしを去らし。援ん。道まら

後端 詩経

白羽ノ白 孟子

洞玄先生。朝よ花一夕よ花を六つれむ。曉を以て
ひ月ふらち梅を第ふ。ま白きるま白玉の白。甲まき
らくと一まきるとの。白甲あし。白羽のふ。甲あし。次。
宿屋乃宿あり。邪老人乃。まやうれ。みを若らぬ。ま
才時之庵のから。花ハ甲よ金粉を塗る。掌中よ愛ま。是
ハ唯四明く狂あり。蓮。亀を以酒平換する。ハ
四孔字を名法。希ま。ま。何となく人乃。報。飛。ハ。別
宿。飛。ま。と。唯。屋。し。

ゆり子を穢乃。名。屋。あり。ま。む。毛。を
い。く。や。一。波。花。か。さ。さ。ね。し。

と古人をよみたり。至福くそ家源く稲音く
神より人和して年程長く。おかく業ん遊ひ成
るしや百北余も存せんくか

才十五 頼光綱小むうひ金れをひく寸絵の瀆
細立て程ありはさのぬあうか

此は瀆十餘
ヨリ流りて
今物列納月
あり

とハ。晋子妻雨の句之は絵をいふこと二条大文へお
もさる侍

清くはるるなると第ふ山うつ

頼光ちり咲

才十六 橙八のきり侍る

道人采元章は筆架成増る。孝白三多筆生花
自是才思日進と流す。孝元成好く筆の及明
る小流く如文。画以名あり。才明危筆筒成はる。一
し成るまゝに流すやある如くはたはさみ。程うた休
の傍珠を焼金火紙照し。一ふらふ路うまの林を
流るは秋も文は。恙是を夏に八采人富のちを
て世始りき流く。老の春風うひ急は家事毛
ぬるし。珠は橙八郎ハ奇矣如恙若人
死くもさふ麻もあうん心同の中
み流るきの流を要乃きうちこめてあふたをひくハ

と字教あつて。歌して。能因はよみう。国平きと
引く却夕此岸とて。子そ有る

以教師と信破笠老人おすあれ

才十七 樽雪へ返事

法明と士つぎ葱湯り。下へねを。肥と付細き釘の

山焚是弟
梅是兄

菊も又と山焚と。楽と才あへ。一三谷とあはと。梅

黄魯直

へりしれ

本滅の脱と。逃と。縁ぬらかも

あく不用心と。下わくある滅の字れと。独笑深海

中影と。し

才十八 武陽渭北に遣ス

東より幸ありと。六時と。信成へ。一。げ度万句。ねり

る。故あくみちさうと。雪か。東福寺。培及乃。門ふ

才。一。字あり。是を。おまひ。す。と。無。と。か。り

聖一と。力。く。屋。乃。若。楓

長く。通天橋。と。能。法。風。を。た。る。と。へ。う。一。穴。賢。と

才十九 阿みとの陰賛

山僧の

小山僧部の。堂。平。の。あり。て。そ。や。れ。法。と。あ。り。と。て

光。君。乃。あ。さ。ら。う。ゆ。ふ。う。ら。ふ。も。只。小。娘。の。事。を

文庫三

物ハといふは、ぬらぬらハの如く、

才ハ北ハ芭蕉ハの跡ハをハ踏ハむハ文ハ

在る雪ハの句ハと粉骨ハ又章ハの中ハ。一生ハ生涯ハ庄園ハの上ハあハん。真ハ盡ハて不ハ盡ハ之ハ。大道ハ意ハのハとハ哉ハ朱英ハ。其ハ句ハ尤ハ真ハ諦ハ。世ハ道ハの重ハ宝ハ。才ハ時ハ危ハ殆ハ人ハとハ加ハてハいハらハらハ共ハ不ハ吹ハらんハ也ハ。才ハ子ハ適ハ也ハ。

之ハ文ハ字ハ才ハ目ハ下ハ旬ハ才ハてハ才ハ有ハるハ

才ハ正ハ雜ハ話ハ

桃ハ徑ハ口ハ
控ハ里ハ口ハ
後ハ庭ハ花ハか
尻ハノハ才ハ之ハ

一ハ江ハ南ハの桃ハ徑ハ口ハ。近ハ年ハ後ハ庭ハ花ハ盛ハ不ハ倍ハをハとハりハ俗ハをハ破ハるハ事ハ目ハ不ハ痛ハくハ心ハはハ好ハむハたハたハ物ハなりハ。中ハ富ハ命ハとハ云ハ

男ハ之ハ氣ハ愕ハ暫ハ時ハをハ金ハ千ハ疋ハの價ハをハ以ハ春ハ霄ハをハ壓ハたりハ。世ハ人ハ書ハ哉ハもハ價ハとハてハ只ハ世ハ者ハをハ掃ハるハ才ハ法ハありハ。大明ハ律ハ云ハ以ハ陰ハ莖ハ放ハ入ハ人ハ之ハ糞ハ門ハ者ハ八ハ杖ハ一ハ百ハ

此ハ刑ハノ放ハノ字ハ行ハ要ハなりハとハをハ放ハとハはハ可ハ知ハみハとハ云ハ事ハ可ハ理ハ業ハをハすハれハ八ハ杖ハ一ハ百ハとハのハ意ハ志ハをハ下ハにハ射ハたハれハ杖ハ不ハ及ハをハ悟ハむハへハ放ハのハ字ハをハ下ハにハ事ハ暫ハ時ハ千ハ疋ハをハ具ハ圖ハ不ハ投ハ者ハ必ハ杖ハ一ハ千ハ道ハ云ハとハ遊ハ道ハとハいハふハ才ハむハへハありハ

一ハ予ハ先ハ年ハ高ハありハ名ハヲハ崎ハとハ云ハ死ハおハよハんハてハいハふハ才ハありハ是ハ道ハのハ御ハ意ハ報ハいハとハいハふハ。死ハてハ後ハ必ハ一ハ家ハのハ老ハとハもハ事ハとハもハ御ハ

照、
照、
各毒ノ各

たアまをゆるりだのみまるといふ事のみだみと
とつへんがもれこまぬ也。不の如なりといひ咲て別死
いふ事事しく小酒の事去御方へお礼笑談の如し
ア上りま極て一家子口説あんなの上理の如れるなり
ん。どやう御去を流らまぬ家ん。口舌つけて一家和て
むつまうううう。その後又笑談ア作りられて早ぬな
らと語りあけもせま。いぬあうう。不の如まゝある
時々能き切字之人お死下其言也善之。東坡の語、張建
封が照、是又ハ方るへ

一と新西谷ふ入て熊坂長範甚社の宝を奪ふの如。殺

多の盜賊をありつとる。長範いへおとひらん橋下
岩上よ体きて。御山の聖女の光を感じたりん。寺子入て
黄金を指さすもつて四面を拜其北ハ茶石。誓ひ云永、
賊徒此山入んぬ。後後と御供を食なく志ぬやう干れ
と決カ植を借つて空墓二枚うきケて。生お死後の如しひ出
唯今つとるを子とらせてる

たつ山まの如くはくしとてこのんを好ま後れ
強盗長範とまらとく。若くも悟らもいふ。ちも和叙
つてそ漸む園なりなる

吾ワレホメ答言

一 元文三の年三月二十日とせり。延宝二年四月廿九日
 夕日をもよほし月を遊ふそふ文の文のうへなるなり
 其ふふとわつと世の人此衣もつり所の花。初音
 さつき。橋おひひうをん。桐りろき。涙あうたりぬる
 とふ。とつりて再びやう。望の語あうくく
 夏の字をわつと夏の句く。秋めをふなを車老
 してとせり。おう。清水ちや。糧あして。内路不麻を設て
 二之友。喫菓。遊。後。後。後。の折。其。句。の。死。文。を。い。ひ。出
 脚。印。を。結。ふ。と。や。く。小。橋。橋。く。決。し。く。一。涙。子。世。の。つ。ね
 詞。家。な。く。致。き。く。く。を。懸。へ。た。守。也。と。氣。を。踏。め。ん

を屈して来る。手。杖。来。め。く。く。一。持。節。も。折。者。な。ん。と
 も。又。ん。の。ま。さ。く。ぬ。ん。ね。と。り。の。種。あ。り。く。り。を。替。く。お
 推。新。吹。海。ふ。心。の。恥。を。泣。へ。又。志。と。く。れ。道。も。あ。り。く。り。と
 放。蕩。の。目。を。さ。く。ぬ。敷。や。ふ。も。あ。く。ま。が。記。お。ま。ふ。其。令
 畫。て。別。掃。府。手。功。り。舟。中。交。ま。つ。る。ま。ま。心。を。引。し
 と。云。ふ。手。て。く。く。く。を。一。夜。中。の。語。を。ね。と。る
 正。く。夏。の。と。り。朝。長。青。を。ね。り。お。暫。汗。を。く。ん。暑
 一。遊。吹。下。ス。四。月。の。風。も。白。ひ。な。れ。中。小。ま。一。夜。く。く
 や。唱。へ。啼。て。地。序。手。入。て。漸。心。静。ま。り。く。り。是。春。中。價
 修。ら。自。負。よ。う。い。と。心。相。い。お。り。く。り。く。り。涙。こ。く。り

一巻一巻録よいのうまれん神必其痛いのりあふ
る古今其例多し。常時教句不慍む人。自他端
あり。去推る而己。跡へき伝たれを異とともみねふ
遠う〜ぬ家む〜とに念〜きよ

老といのりけり涙流るんととてりよき

才廿二十七回忌よ贈るなま句

秀鏡の如し先考十七回忌遠忌を頼りて拙吟
のよ折 詠子月夜をねるく比 烟涼し一与を願る
昔ある日やま〜も 伴縁の右た

才廿三勸進子歌

一朔雪路果然として下るハ松原危古くは
なり〜。ゆり〜とあ〜とや。節を幸て神の
仰の山流流れ林をんすてりあり
瞋て云通子富て書を賞へ。世に富いともら田を
賞て用る事あり。神。句中あり。千鐘あるんを
いよこの安ん志うあれと

ふ〜書事ある〜飛苑北橋何ら

昔享保廿一年春三月仲院

御照又

弟苗 喚洞亭小遊ふと〜

ひらる。西の山建つまき家梅くまめう。た住居を
わく上久ぐれ。一うな。如雪の囀り。うらうら
あ井乃夕言。いうてそふハヤ

上畧
あまのこねま
言の囀
徹事記

一、家之成去而して朝乃時雨うら
庭紫の樹乃ぬ世界なるうら

才廿五 紀別戸田何某三回之一集

發疑之指示
切ハ人
蕭相國
世家

又本左右乃暮秋花咲交けり。も世の飛人のあ月の
雪うさうひみうけてほるの氣を。有日月の三秋もほ
とら。おとよ平な疑して指示項人ありとは。草まの
さあうらうら

ツヒエヲカ
一二

一二あり秋の存草乃る

面上三年土
まぬ州又生
老杜

面上三年土。秋風又白ひをくむ。山。里。芳。人
ちうん

才廿六 書ありなくまきる人のまきる

い。秋のほめ。我筆。第。草。乃。る。み。の。う。ら。ハ
く又恒あり。い。そ。く。い。ひ。ま。そ。あ。ら。う。ふ。お。み
の事え。わ。ま。ふ。九。月。十。三。日。の。み。平。を。身。は。る。ま。る。
お。道。る。跡。の。ま。う。く。短。さ。ま。の。言。へ。は。ま。く。ハ。乃
屋。で。ほ。れ。れ。と。あ。く。て。ま。ふ。子。孫。中。み。も。ま。う。わ。か。く
ま。の。み。た。る。む。の。ま。う。ま。な。さ。か。う。は。り。て。ゆ。ま。ら。し

け。んまゝいひ包て。紙書のものをもとくまゝくか一言
 二言。佛の言は教を文も叶ふ言をいひ佛
 言ハ。佛の心も海にまゝをりて一なるをいひ
 を折。高き橋めく人笑ひ草もいふや。花の思を
 ありていさつ日も日敷きまらう。たさきむむむむ
 ち。月影もぬくて。旅より一歩進ハ志あて熱る才の
 宿も。まゝさすべき節の人あみたる。縁も。かゝるふ
 おとひ乃。草花みつゝむきむく。目もとぢ。縁も
 耳小傷を伝てよ。盡る事あり。や。ぬる。きく。蝉乃
 羽の。ちく。落き。濃たるとおとひ。静りて。せめて

旅中
 春陽
 不意
 エウリカ

子といふその。ちさな力ふと。押流は。境界不
 流。ちく。縁。あ。ま。や。や。ち。か。中。子。流。家
 と。別。わ。り。なる。家。ま。子。乃。ま。と。子。を。縁。て。あ。く。な。ま
 と。ん。ハ。ま。ま。ふ。う。か。ん。あ。お。乃。花。の。涙。と。ま。り。み。て。
 袖。言。乃。曉。ハ。清。ら。り。さ。る。こと。も。又。来。る。愛。を。あ。の。ん
 小。ん。を。あ。り。人。の。う。つ。た。誰。れ。の。境。小。あ。り。人。あ。り
 は。い。流。被。計。み。ま。ま。ん。と。寂。ん。ぬ。き。み。ハ。人。の。う
 き。を。引。流。や。折。如。可。知。の。書。ハ。か。く。空。を。あ
 と。香。稿。庵。と。ま。る。せ。ら。る。ふ。せ。ん。ま。ま。げ。く。て。あ。ら。た
 傳。る。平。出。流。を。い。命。ふ。ら。ん。と。を。み。と。を。後。流

魂消

ア一芥の心ははこころぬうく神んけ引るふれ。
きふを是よりうけて。オはつゝ神んよあへふ平
作する洞妙如と。阿くおあするもいひさへあひむきひて
ぬ。カのるは孤竹小して信の立振も白首をく。指節て
障く若来しき方みを後五くくう返してハ。何と
くあうせし事の中く悟さるうふはこれとあ
た西月也も

吾を云ひ
人を此れむ
活潑其然
を扱ふ
後文其意の
一格あへ

我平克ておとひく可はる花松楸
然を療しむる平匡阿う。我う一宗の要を便く
風を起しあう哉すひくふ。夏を花はて地のくハぬ也。日

ハ生キ。月死ス。あんそ人のう人を也

中七 林外老人へ贈る

茶室因本林外老人。昔は茶室遊て至精至好人
柴扉を敲く。光陰此年六十之賀阿う。唐歌を抄
平。別候く六十六

亀乃も哉引も飛井の水如春

中八 後東亭

泉境只情別業之
濱亭也

後京極秋風も今日の空もかひのねとあひ連ハ西平
うねるなるりり。げさう西の海をほくると。菊蓮際
く長波阿ひきあり。北平岸の松連なるをあむら

ノ御靈ハ
伊弉諾之御
事里至吉云
道返大神ハ
泉門小塞ま
才大神也
所ノ橋ハ高
檣殿也

ノみと海のさなを前追ふ者なり。ゆくゆくは風塵これ
る瓦の塵汚成る也。いづれもすくく情成る也。南と指
さるる屋をさるる裏の酒を宮たけり。あふ信之。信之夷
て。二と三声眉を信之。もすは信之。共すは信之。
必やいひ給ひて。子付と答ふ。けし時風を千景。暫く破
らるる。道返の大神。さな。心を定神也。於是島也。臨確

急度也
島也臨崖之
車陸をひ
海賊

を嘗て言虚うよのよを感し。然るも小ねふ。すの
危るなり。ハ暫め危あり。操航を握一肘小
四時の強をほく。嘯て重なり。して外ス

其うく名大星を護る。一一家富吉平常ふあん
能久た無くと表之揚之
二寛保成者文下院
才九門生之能人向不
夕立乃雨と名子めいり。如那
名子乃過ハ日月乃融めと。民皆之能也

雨縮と云ハ
幽林五記
下リ

を更るよ乃そく民皆去る我乃く。雷走り雨
をく人を撓む。百たぐ雨縮。去るをちる
乃雪。山く花築く。人皆心我流し清味を
僧の神かさる子うり。強士ハゆりて
あくあけ所流も油をてり。市小別る
も茹るも百合も竹も。川麻の皓齒をのふ
水橋の柳葉蘆遠小ゆき。我僕尻を高く
く伏のひく。到標干の滯ホキき波をぬき
く強を後る。空八倍の鳥は白へん
空くく及照華心風のそめ清貴を
取る一句を終りて。

吉城皓齒
在樓紐と云

下く休遊
玉を初
菜花物語

そくち子而あ。晴く益く怒の字そく
切あま。されく花。吾杜宇の句。唱の字
矢ひ別求。奴もたきけ山の言けり。工業
よのけ及の守。只又予自暴自弃の人
白をぬき。とあれて連家り句
なつて下り

才三十一小野天神を納く跋 紀府

一軸く歌之綿城下く人。岡次
年久信心ちるく上新可。其
就中黄雲く御神徳常小感く
淡く紀府子信宿く安三之
両君く句を乞

了て合きて三吟し奇伝とる是を放くハ六儀の風頭
言月花鳥別神惠小叶ひ。神慮外六合り彌
らん是は我喜々退て細めたり一平一復之松の標
たり事をもし心くめぬ

右全篇門人 艸々庵雪川 模寫之

淡々文集卷三終

凡そ俗言存謙より
四時の飛經を
去来文素板角
其時乞下取去秋
子ハ人刻高白公を原

くぬきしん片川かまふ
雨土能花吟舟あまふ
法書きり口一りの
まをむしんたにま
神のまじりまみ雨

一
法

五
珠
鼓

鳥
林

友

春遊云鳥林の
尾成侯の藩臣
三浦長門守殿
の八文舎嘉
の論と子書
とかな

文貨堂誦諧書目

半時庵淡々文集

前編三冊

出来

同 後編

嗣出

同 藪句集

全

行脚集 東菴

富天選

出来

押花宴

全

出来

續蛙海

半時菴高判拔書

近刻

寛保二年歲次壬戌十一月望

心齋橋筋北久太郎町南江入

浪速書肆

梁瀬傳兵衛藏版

